垣本言雄小伝

垣本正雄

垣本言雄（ときお）は、明治二〇年二月一四日、松太郎（諱は宣守、通称は平六）の六男として大分県大分郡勢家町（現大分市内）で生れた。九人兄弟の末っ子であった。当時の世帯は、父平六（五七歳、以下数え年）母千和（ちわ）（四五歳）次兄茂人（二四歳）次姉マツ（一四歳）三姉セツ（一一歳）言雄（一歳）の六人家族で、長姉カメは既に嫁ぎ、長兄鎌吉・三兄彦治は若くして病死しており、他も早世だったから、一家の生計は小学校教員の次兄茂人が主となって支えていたが、まだ薄給の身であり苦しい生活状態が続いていた。

垣本家は旧府内藩（大給松平氏二万千二百石）の藩士で、元祖の平六宣記が一五才のとき、江戸在府の初代藩主忠昭公の小姓に召し出され、寛文七年（一六七七）三月知行百石の給人格に昇進して以来、代々家督を継ぎ、歴代の藩主に仕えて要職を勤め、父の松太郎は六代目の当主であった。維新前は藩の槍術師範役となり、藩主にも槍術指南をしたこともあった。しかし廃藩置県により役儀御免となり、家禄を返還するに至った。以後家運が没落の一途を辿り、元祖以来拝領の屋敷（現大分市内若松通にあった）も手放す羽目となった。松太郎は明治一二年一一月二一日、家督を長男鎌吉に譲って隠居したが、不幸にも明治一九年一一月一五日、一家の支柱であった鎌吉（二八歳、小学校教員）と三男彦治（二一歳、収税吏）の両人を疫病の為、同じ日に失なう悲運に遇い、他家の養子だった次男茂人（二三歳、小学校教員）が復籍して家督を相続して、一家の生計を担ったが、五人家族を抱えて難渋した。松太郎は明治二五年五月一八日、大分郡八幡村大字八幡字大山の旧庄屋宅で病没した。享年六二才であった。

七男茂人が同地の小学校教員だった時で、不遇な晩年に終った。当時言雄は、まだ六才であった。母の千和は、旧岡藩士高崎誠助真盛の長女であったが、事情があって同藩の広瀬順蔵重弘（勤王家廣瀬友之允重武の父、軍神廣瀬武の祖父）の養女となり、一七才で垣本家に嫁いだ（千和の異母妹琴は、廣瀬重武の後妻となっており、高崎・廣瀬両家は親戚の間柄であった）。

明治二七年四月、言雄は学令に達し、大分郡大分町の大分尋常小学校に入学した（八歳）。

明治三五年三月、大分町の大分高等小学校を卒業した（一六歳）。

明治三七年二月二八日、家運を挽回すべく決意して大阪に行き、店員奉公のかたわら勉学に努めたが、母千和の痼疾（リュウマチ）が昂じて起居が不自由となったので、介護に当るため僅か半年位いで在阪を断念して帰郷した（一八歳）。

明治三七年七月、夫と死別した次姉のマツが一人娘を連れて復籍し、又長姉カメの子供達も同居したので多人数の世帯となり、杵築警察署巡査として在勤（前職は小学校教員）の次兄茂人からの送金や、産婆養成所を卒業して開業したばかりの次姉の収入では足りず、家計は火の車であった（同）。

明治三八年一月頃から明治四〇年一一月頃にかけて、言雄は病母の介護のかたわら、家計を助けるために、税務署や郡役所の臨時雇となったり、菌苔の電鉄切符発売所に勤めたり、一時は下宿までして九州鉄道株式会社（のちの国鉄、別府の永石にあった）に勤めたりしたこともあった。また、明治三九年一月より大分簿記学校の夜間部に入学して簿記を勉強し、就職の際に有利になることを図った（一九歳～二〇歳）。

明治三八年一一月三日に、一家は勢家本町の借家に転居した。これ迄の借家は、狭隘で多人数世帯の住居には不向であり、病母の介護にも差支が多かったからである。移転した家屋は、広くはあったが構造が旧式で、病母の起臥する居間は、日中でも薄暗い程であった。そこで家主に乞うて壁を落とし日光がはいりやすいように工面した。また上雪隠の設けが無く、外雪隠は距離が遠くて病母にとっては不便だったので、言雄は夜も日も母を背負って行く有様であった（一九歳）。

明治四〇年五月、徴兵検査を受けて第二乙種歩兵補充役に編入された（二一歳）。

明治四〇年一一月一〇日、富士艦が大分港外に投錨した。艦長広瀬勝比古氏軍(神広瀬武夫の兄)は病母の新戚関係にあるので、言雄は病母に代って親族を誘って同艦を慰問したり、夜は大分町春日浦の春日亭に招待して親族一同で晩餐会を催した(同)。

明治四〇年一一月一二日、大分町役場の臨時雇に採用された。言雄の親友の父岡悌蔵氏(町助役)の世話によるものであった。この年四月一日に、大分町・西大分町・荏隈村・豊府村の四ケ町村が合併して新しく大分町が発足し、事務が多忙になったからである。郡役所の臨時雇のころ、上司が将来、書記に任用してくれると云ったが、郡制は早晩廃止になるとの噂があり、大分町は遠からず市制施行の可能性が濃いので、将来性のある町役場への就職を志向したのであった(同)。

明治四二年六月一三日、臨時雇当時の執務ぶりが買われて、町会で大分町役場(明治四四年四月一日より大分市役所となる)の書記に推薦の光栄に預かり、一六日付けで町長玉置本資氏より書記任用・増俸・係指定の三つの辞令が交付され三重の歓びを味わった(二三歳)。

明治四三年六月一八日、大分郡大分町大字大分四四一番地(南新地)戸主佐藤熊彦の長女世器(せき)と結婚した。佐藤家は、天正の昔より代々大野郡今市村の大庄屋役を勤めた旧家だったが、熊彦氏の代には、離村して大分町に居住していた(二四歳)。

明治四三年七月三〇日、勢家本町の借家から近くの字豊久の借家に移転した。今度の家屋も、雪隠が下にあって病母が使用するのに、不便なので、家主に懇願して上雪隠を設けてもらった。言雄の妻帯が早かったのは、病母の世話を妻にやらせることが主眼であったから、妻が嫁入りして以来まめまめしく病母に仕えてくれることは嬉しかった(同)。

明治四四年七月一三日、長男が生れた。「宣雄(のぶ)」と命名した。次兄茂人の意見で、垣本家の名乗りの「宣」を採り、言雄の「雄」とを併せて「宣雄」としたのである(同)。

明治四四年八月二八日の夜半に、隣家の厩屋から出火して住居が類焼した。隣家の主婦の焼灰の不始末が原因で、馬は焼死したが、人は無事だった。あいにく妻は実家に帰って不在だったので、言雄は病母を背負って避難し、生後一ケ月余の長男は滞在中の次姉マツが抱いて避難した。幸い消防夫の敏速な活動で家財の大半は搬出されたが、残念だったのは先祖の貴重な遺

品を焼失したことであった。その中に、父松太郎が槍術の修業中、他藩に出掛けて試合をして歩いた旅日記があって、後々惜しまれた。思いがけぬ災難で当惑したが、運よく市内春日町の第二小学校（現春日校）の近傍に、新築して間もない借家が見つかり引越した(同)。

明治四四年八月末にこうした被災事情で次兄茂人夫婦が家事を担当することになり、勤務先の杵築警察署を退職して大分市に帰り、言雄等と同居して生活することになった(同)。

大正元年の終り頃言雄等は次兄との同居をやめて市内北町の借家に別の世帯をもち、病母の世話を兄夫婦に委ねた。兄嫁は病母の世話をいとい色々の口実をもうけて実家に帰り、長逗留することが屢々であった。次兄は困却して、言雄夫婦に病母の世話や家事の始末を求めて来た。妻は夫の立場を考えて、幼い長男を連れて度々義兄の住居に早朝から夕方遅くまで加勢に出掛けた。こうした苦労から脱するために、言雄は再び病母との同居を決意し、持家の建築を思い立つに至った(二六歳)。

大正二年九月一八日、次男正雄が誕生した。大正に生れたので「正」の字を付けて「正雄」と命名した(二七歳)。

大正三年四月、大分郡東大分村大字今津留一、五七五番地(現大分市中島町)に住宅を新築して、病母との同居を始めた。家屋は木造平家建の簡易な構造であったが、病母専用の小部屋(三畳)を設け、便所も隣に備えた。これで多年の借家住居から離脱した(二八歳)。

大正六年六月二六日、長女智子(ともこ)が新住居で誕生した(三一歳)。

大正七年七月一一日から一二日にかけて県下は暴風雨に見舞われ、低地の中島一帯は水没して海状となった。妻は長男・長女と共に出水前に安全な場所に避難していたが、病母は身体が不自由のため避難を拒んだので、危険状態となり、言雄・病母・次男三人は救出に来た漁船でかろうじて脱出し、市内荷揚町の武徳殿に他の罹災家族と共に収容された。洪水の収まった数日後にやっと自宅に帰ったが、この洪水は明治二六年の大水害につぐと云われ、言雄は水害の恐怖を初めて体験したのであった(三二歳)。

大正九年二月二三日、母の千和が七八才で死去した。後半生を痼疾のリユウマチで苦しみ続けた生涯であったが、言雄夫婦の終始変らぬ手厚い介護に満足して他界した。垣本家の旧事を語った唯一人の生き証人であったから、在世中の懐旧談は後日の参考となることが多かった(三四歳)。

大正九年の冬、妻世器の父佐藤熊彦氏が言雄の住居で死去した。熊彦氏は、長男健夫婦と折合いが悪く、同居を嫌って独居生活を続けていたが、晩年には言雄夫婦が引取って面倒をみていたのである。言雄は末っ子の身でありながら、生母と義父の両方の親を看取ったのであった(同)。

大正一〇年三月から五月にかけて、市内新川海岸の広場で九州沖縄八県の連合共進会が開催された。中島の住居から会場は近かったので、家族打揃って度々観覧に行った。この頃が言雄にとって生涯のうちで最も楽しい時期であった(三五歳)。

大正一一年四月一四日、次女が誕生した。人形そっくりの容貌の秀れた女児だったので、「房香(ふさか)」と命名した(三六歳)。

大正一一年五月一六日、妻の世器が、幼少の二男二女を残して病死した。まだ三五才の若さであった。次女房香を出産してから健康がすぐれず、これが命とりになった。言雄の不幸の始まりであった。このため生後一ケ月の次女は、市内で商業を営む夫婦が子に恵まれず貰子を欲しがっているのを幸いに、同家の養女として引取ってもらった(房香は五歳の頃疫病で落命した。薄幸な子であったが、生前は他人が羨む程養父母に寵愛されたという)。また折角新築した住宅も手放し、長男宣雄は次姉マツの婚家先の門司市東堀川町一丁目の兒玉家(歯科医院開業)へ、次男正雄は三姉セツの婚家先の大分郡石城川村来鉢の佐藤家(農業経営)に預けて養育を依頼し、言雄は長女智子と二人で次兄茂人の借家に再び同居することになった。次兄の家は市内春日町の第二小学校(現春日校)の西門の傍にあって、文具店を営み巡査退職後の生計を支えていた(同)。

大正一一年一〇月三一日、大分市大字大分八二七番地戸主寺司三郎の次女利江(りえ)を後妻に娶り、次兄の家と別れて、市内王子町裏通りの借家で世帯を持ち、程なく二人の姉に預けていた長男と次男を引取り、先妻世器の死後初めて家族が揃い一家団欒の生活に戻った(同)。

大正一三年一〇月、かねてより研究を続けていた奇書「上記残篇」の史的価値に注目し、これを世上に周知すること思い立ち和綴二冊(非売品)として刊行した(三八歳)。

大正一四年七月、慢性の胃腸病に悩み執務にも差支えるようになったので、恩給の受給資格の年限に達したのを機に退職を決意し、願い出て許可された(数年後鍼灸療治で奇跡的に治癒した)(三九歳)。

大正一五年二月頃から後妻利江との間で生活や子供達の教育問題で不和となり遂に協議離婚の手続を執るに至った(四〇歳)。

大正一五年四月頃より、税務署の臨時雇となり収入の途を講じていたところ、五月になって大分県教育会附属の福沢記念図書館(市内荷揚町所在)の職員に採用された。以後、図書館所蔵の県内の郷土資料に接する機会が多く、関心を深めることになった(同)。

大正一五年七月、豊国史料の第一集『豊後風土記と豊後図田帳』を郷土史家の工藤覚次氏と共編で刊行した(同)。

昭和二年四月、速見郡藤原村字安養寺一、一九三番地高橋春吉の長女ヤチヨを二度目の後妻に迎えた(四一歳)。

昭和四年三月、二豊郷土史料『豊州志外五種』(非売品)を刊行した(四三歳)。

昭和四年六月より大分県教育会発行の機関誌『大分県教育』六月号(五二四号)に「郷土史壇」の欄を創設し教育界の人々に郷土史料の紹介を始めた(これは昭和一七年一月号六七三号まで繰げられたが、以後は、戦中のため断絶した)(同)。

昭和五年九月九日、三女が誕生した。五番目の子供であるから「伍子」と命名した(四四歳)。

昭和六年四月一日、福沢記念図書館が県に移管され、県立大分図書館となった。これに伴って言雄も県職員に所属したが、この年に、「郷土史関係解説」(稿本)を編述した(稿本は現在県立大分図書館の蔵書になっている)(四五歳)。

昭和八年四月、県立大分図書館職員を罷めて大分県教育会附属の教員互助会書記に転属した(四七歳)。

昭和八年一二月『郷土史料大友系図外数種』(非売品)を刊行した(同)。

昭和九年五月、市内中島四条二丁目に二度目の持家を新築した(昭和二八年九月に病没するまで居住)(四八歳)。

昭和九年六月五日、四男の和雄(かずお)がこの新家で誕生した。昭和生れなので一字をとって「和雄」と命名した(同)。

昭和一三年一一月『大分県郷土史料集成』系図篇戦記篇㈠及び戦記篇㈡の各巻を刊行した(五二歳)。

昭和一八年三月、大分県史談会叢書の第一巻として『府内藩年中行事』(非売品)を刊行した(五七歳)。

昭和二〇年三月『大分県郷土史料集成』城譜篇外数篇を刊行するため、大阪市内の印刷工場で印刷中に米空軍の大空襲を受け、一切が焼失して刊行が絶望となり、多年の宿望だった郷土史料集成全巻の出版が未完の憂き目に遇った(五九歳)。

昭和二〇年七月一六日の夜半、大分市は米空軍の大規模な焼夷弾攻撃を受け、市内の中心部が焦土と化したが、中島の言雄の住居は運よく戦禍を免れた(同)。

昭和二三年二月八日、大分県教育会が占領政策により解散となり退職した(六二歳)。

昭和二三年四月より九月までの期間に、県立大分図書館が久しく未整理の儘で保管していた旧府内藩の記録類や古文書の整理を単身で引受けて完了し、以後閲覧に供することが実現された(当時作成した目録の原本は現在同館の蔵書になっている)(同)。

昭和二四年一一月から昭和二八年三月末日までに、郷土史家の久多羅木儀一郎・大塚富吉両氏と共に大分市役所の委嘱を受けて、県立大分図書館所蔵の旧府内藩の記録類の筆写作業に従事し、解読を容易にして、昭和三一年に大分市役所が出版した『大分市史』の編纂に貢献した(六三歳～六七歳)。

昭和二五年一一月三日(文化の日)に、これまでの功績が認められて、上田保大分市長より第二回大分市文化功労者として表彰された(六五歳)。

昭和二八年七月、郷土史料叢書第一集『豊府指南外四種』(非売品)を刊行した(六七歳)。

昭和二八年九月、郷土史料叢書第二集『勝山歴代豊城世譜』(非売品)を刊行すべく印刷中、病を得て中絶し、未刊となった(同)。

昭和二八年九月二二日、病状が好転せず遂に不帰の人となった。行年六七才。法名唯有院幸道日観居士。市内の上野墓地公

園内の本光寺域に葬られた(同)。

昭和四八年一〇月『大分県郷土史料集成』既刊三巻の復刻版が、遺族によって、京都市左京区今出川通りの臨川書店より刊行された。

[redacted]

大分県地方史料叢書八―一

文化一揆史料集（一）

党民流説

豊田・秦・檜本編

近世二豊の最大の一揆、文化八・九年一揆に関する基本史料「党民流説」を収載。底本として後藤碩田の自筆本を使用。その公刊は、全国の研究者からも注目を集めている。

（頒価　会員二〇〇〇円、会員外二五〇〇円・送料共）

大分県地方史研究会

大分県地方史料叢書八―二

文化一揆史料集（二）

岡藩編

豊田・秦・尾登編

本巻には、「竹田領百姓騒動記」など八史料を収録した。これによって現在入手し得る岡藩内に関する文化一揆史料は、ほぼ網羅されたといえよう。今後、県下の文化一揆の研究が飛躍的に進展するものと期待される。

（頒価　会員二〇〇〇円会、員外二五〇〇円・送料共）

大分県地方史研究会